

大学生における浮気観と浮気・被浮気経験との関連

船谷 明子*・田中 洋子**・橋本 和幸***・高木 秀明****

The Relationship between the View of Fickleness and the Experience of Being Fickle and/or Having Fickle Lover in University Students

Akiko FUNAYA , Yoko TANAKA ,
Kazuyuki HASHIMOTO and Hideaki TAKAGI

問題と目的

浮気は、老若男女を問わず、多くの人にとっての関心事である。関心があるだけの人もいれば、恋人の浮気を疑っている人、実際に浮気を実行している人もたくさんいる。また、テレビドラマでは男女の浮気が織りなす愛憎劇が高視聴率を上げ、雑誌にも多く特集が組まれている。浮気調査を請け負う探偵業者も多く登場し、活躍しているのが現代の状況である。

しかし、いわゆる「浮気」に対する観念が、学問的に認知されてきたわけではない。心理学における恋愛研究があまた存在する中でも、「浮気」を扱ったものは少ない。それだけ、「浮気」というテーマが恋愛研究の中では俗的なものとして避けられてきたとも考えられる。

松井(1990)は大学生の恋愛中の行動について調査を行っている。その結果、30種類の行動の経験率が得られた。この調査の回答者は異性交際において、ほぼ全員が交際相手と「友人や勉強の話」をし、8割以上が「子どもの頃の話」や「家族の話」をしている。7割が「プレゼントをしたり、されたり」し、5割以上が「用がないのに」電話をしたり、会いにいったりしている。「ボーイフレンドやガールフレンドとして友人に紹介」している人は4割で、「恋人として紹介している」人は全体の約4分の1、「結婚相手として親に紹介した」人も2%いた。また、30項目のうち、回答の偏りの大きい「友人や勉強の話をする」と「結婚相手として親に紹介する」の2項目を除いて分析した結果、28項目は直線的(一次元的)な構造をしていることが明らかになった。まず第1段階では、「子どもの頃の話」や何らかの相談をするといった友愛的な会話から、「悩みを打ち明け」たり「人にみせない面をみせ」たりして、内面を相手に示すようになる。「仕事や勉強の手伝い」や「肩や身体に触れる」行動もみられる。第2段階は「デート」が中心である。デートをする頃になると、「用もないのに」電話をしたり、会ったりする。この時期には「手をつなぎ腕を組んで」歩くようになる。第3段階は「ボーイフレンド、ガールフレンドとして友人に紹介する」段階である。「キス」をし「抱きあう」行動も現れる。第4段階は「恋人として友人に紹介」する行動だ。第5段階は「結婚の話」から始まる。「一般論としての結婚の話」から始まり、「プロポーズ」をへて、「性交」「結婚の約束」へと発展する。

* 大阪保護観察所

** 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

*** 平塚市子ども教育相談センター

**** 学校教育講座

恋愛感情が発達した青年後期にあたる大学生にとって、恋愛が彼らの生活の中に占める割合は大きく、その意味も重要になってくる。また、青年期の恋愛感情の発達や恋愛経験を通して、浮気感情や浮気経験も発達していくと考えられる。

ただし、既婚者の浮気と未婚者の浮気では状況が全く異なっているため、今回の研究では未婚者の浮気に焦点を絞り、未婚の男女の恋愛の中での浮気について検討したい。また、不倫という言葉は悪いものというニュアンスが強いため、本研究では浮気という言葉を採用し、浮気をするを「浮気」、浮気をされることを「被浮気」と表記する。

中村・藤本(2001)が提唱した恋愛観媒介モデルによると、様々な恋愛経験から恋愛観が変容し、その恋愛観に基づいた行動や交際を行うという。浮気に関しても、様々な浮気経験・被浮気経験から浮気に対する考え方、浮気観が変容し、その浮気観に基づいた行動や交際を行うのではないだろうか。本研究では、浮気経験・被浮気経験と浮気に対する考え方との関連について検討したい。

また、様々な先行研究において、恋愛における性差がみられているが、浮気に関してはどうか。橋本(1992)の恋愛の4側面「密着性」、「快楽志向」、「友愛」、「盲目的愛」のうち、「快楽志向」の側面はLee(1974, 1977)のルダス(遊び)型の恋愛にあたり、浮気志向を表すものである。しかしLeeの理論に基づいた研究では、性差の有無について一貫した結果は得られていない。快楽志向における性差も、はっきりとはみられていない。

一方、Rubin(1970)によると、恋愛尺度と好意尺度との関連については、女性は友人に対する気持ち(好意)と恋人に対する気持ち(恋愛)を区別しているのに比べ、男性は両者を混同しやすいという結果であった。よって、男性の方が、好意を恋愛または浮気に発展させやすいと考えられる。

また、松井(1990)によると、恋愛行動と恋愛感情の関連については、男性は恋愛の初期から相手を愛する気持ちを強く持つのに比べ、女性は交際が深まらなると相手への気持ちが高まらないという結果が出ている。よって、女性の気持ちが高まってきたときに男性の気持ちは弱まっている可能性が高く、その時期に男性は浮気をしやすいと考えられる。

このように、総合して考えると、男性の方が女性に比べて浮気をする要因が多いため、男性の方が浮気傾向が高いと考えられる。したがって、本研究では、浮気経験と浮気に対する考え方における性差についても検討したい。

そこで、調査1では、数十名の大学生に予備的探索調査を行い、浮気の定義や原因などに対して、大学生がどのように考えているのかについて概観し、調査2の指針とすることを目的とする。

そして、調査2では、大学生の①性別、②浮気経験・被浮気経験、③浮気の定義についての考え方、④浮気に対する態度、⑤浮気願望といった5点の関係性について検討することを目的とする。

《 調査1 》

方 法

1. 調査対象 首都圏の大学の学生65名 (男性：35名、女性：30名、平均年齢：21.2歳)
2. 調査時期 2004年10月下旬
3. 調査方法 無記名・個別記入・自由記述式の質問紙調査で、筆者の個別配布・個別回収形式で実施した。所要時間は、約10分であった。

4. 調査内容

- ① 性別、年齢、学部、学科・課程について尋ねる項目
- ② 浮気の定義についての考えを尋ねる項目(浮気をする立場・浮気をされる立場の2項目)
- ③ 浮気は許せるものか否かと、その理由を尋ねる項目(1項目)
- ④ 浮気は避けられるものか否かと、その理由を尋ねる項目(1項目)
- ⑤ 浮気願望の有無とその理由を尋ねる項目(1項目)

結果と考察

1. 浮気の定義

得られた回答を感情・欲求と行動に分類し、さらに感情・欲求を好意的感情、性的欲求、恋人への罪悪感の3つにまとめた。その中で、調査2で用いる質問項目として使用した回答について、表1に示す(使用の際、語句を修正したものもある)。

表1 調査2に用いた回答①

<p><感情></p> <ul style="list-style-type: none"> ・恋人以外の人を好きになる <p><行動></p> <ul style="list-style-type: none"> ・恋人に内緒で2人で会う ・恋人以外の人と付き合う
--

感情においては、「恋人以外の人を好きになる」、「好意を持つ」、「気になる」などの好意的感情を表す回答が最も多かった。行動においては、「恋人以外の人と手をつなぐ」、「キスする」、「セックスする」、「2人で会う」、「恋人に内緒で2人で会う」などの回答が多かった。同じ行動でも「恋人に内緒で」「隠して」というキーワードがつくと意味が変わってくるということが明らかになった。よって調査2では、1つの行動・感情につき、恋人に打ち明けない「内緒」条件と、恋人に打ち明ける「報告」条件の2通りで質問することとした。

2. 浮気は許せるか

浮気は許せるものだと思うかという項目において、男性は13名(37%)が許せる、21名(60%)が許せない、1名(3%)がどちらともいえないという結果になった。一方、女性は11名(37%)が許せる、15名(50%)が許せない、4名(13%)がどちらともいえないという結果になった(図1)。

許せるものだと思う理由については、1度までなら許せる、仕方ない、その他の3つにまとめた。許せるものだと思う理由については、道徳的に、自分や恋人などが傷つくから、恋人と別れるべき、の3つにまとめた。それらの回答の中で、調査2で用いる質問項目として使用した回答について、表2に示す(使用の際、語句を修正したものもある)。

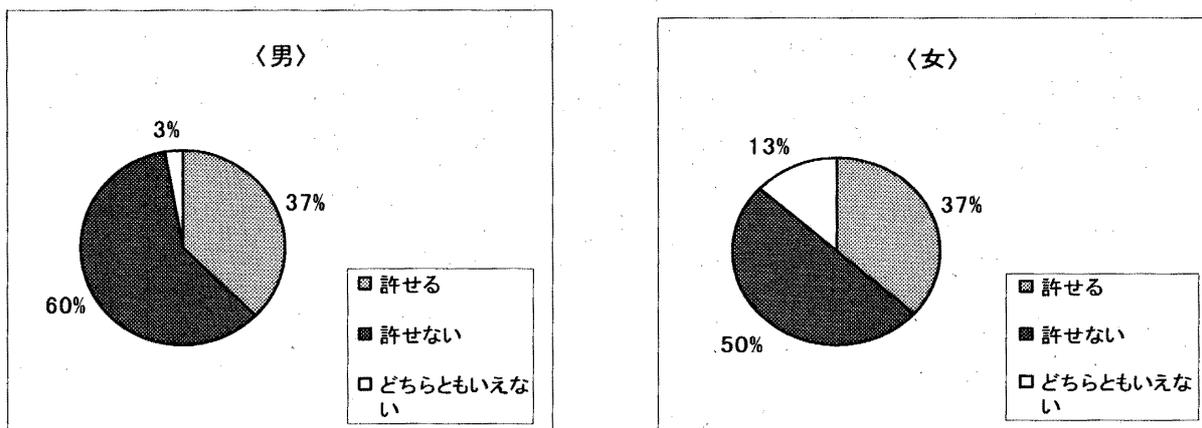


図1 「浮気は許せるものだと思うか」の回答結果

表2 調査2に用いた回答②

<p><許せる></p> <ul style="list-style-type: none"> ・1度までなら許せる ・他の異性が気になるのは仕方ないから ・恋人のことが好きならまだ許せる <p><許せない></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分がされたら嫌だから ・浮気する前に別れるべきだ ・道徳的に許せない
--

3. 浮気は避けられるか

浮気は避けられるものだと思うかという項目において、男性は23名(66%)が避けられる、11名(31%)が避けられない、1名(3%)がどちらともいえないという結果になった。一方、女性は19名(63%)が避けられる、9名(30%)が避けられない、2名(7%)がどちらともいえないという結果になった(図2)。

避けられるものだと思う理由については、自分次第、2人(恋人同士)次第、恋人次第の3つにまとめた。それらの回答の中で、調査2で用いる質問項目として使用した回答について、表3に示す(使用の際、語句を修正したものもある)。

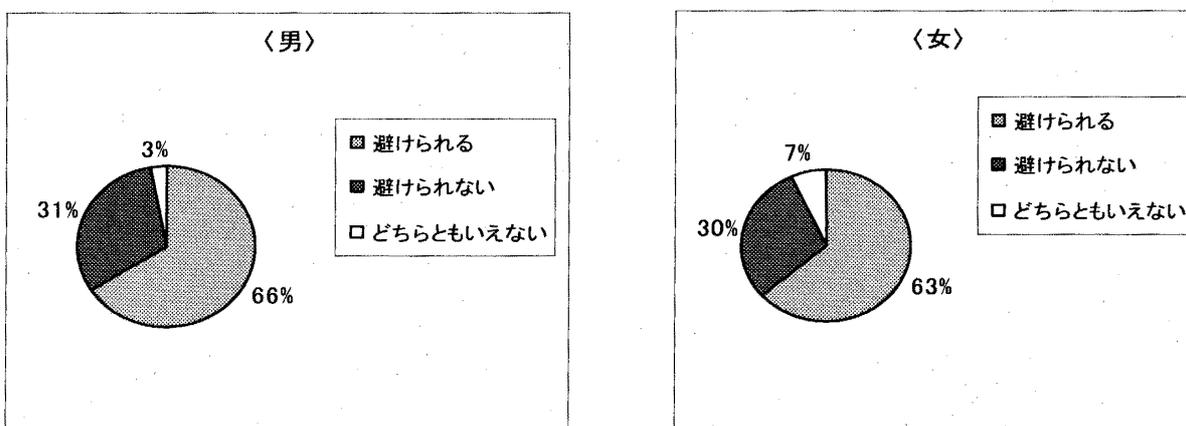


図2 「浮気は避けられるものだと思うか」の回答結果

表3 調査2に用いた回答③

<p><避けられる></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自制心があれば ・ 浮気されないだけの魅力を持てば ・ 恋人の事を真剣に考えれば <p><避けられない></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 男は浮気する生き物

4. 浮気願望

浮気をしたと思うかという項目において、男性は9名(26%)がしたい、25名(71%)がしたいとは思わない、1名(3%)がどちらともいえないという結果になった。一方、女性は5名(17%)がしたい、22名(73%)がしたいとは思わない、3名(10%)がどちらともいえないという結果になった(図3)。

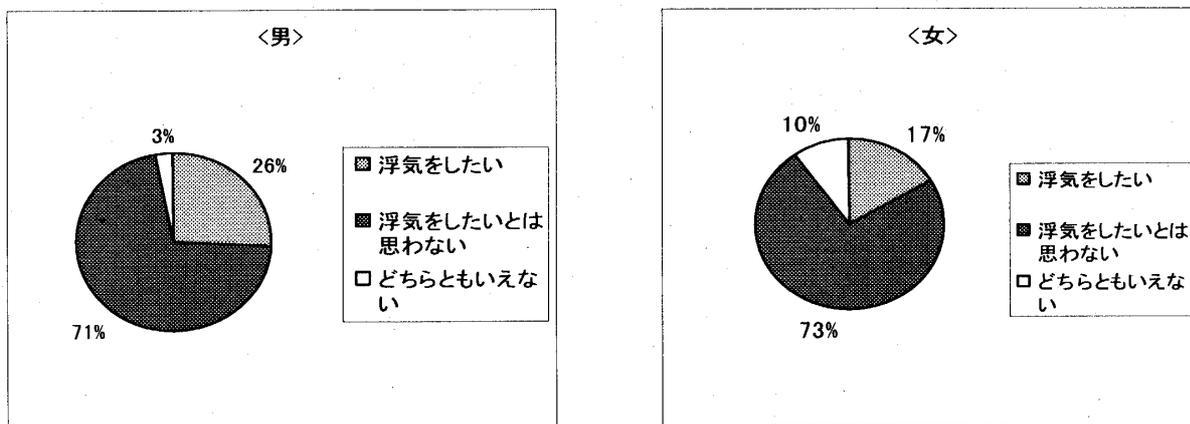


図3 「浮気したいと思うか」の回答結果

《 調査2 》

目 的

本調査では、大学生における①性別、②浮気経験・被浮気経験、③浮気の定義についての考え方、④浮気に対する態度、⑤浮気願望といった5点の関係性について検討することを目的とする。

方 法

1. 調査対象 首都圏の大学の学生 311名(男性151名、女性160名：平均年齢20.5歳)
2. 調査時期 2004年12月上旬
3. 調査方法 無記名・個別記入式の質問紙調査で、筆者の個別配布・個別回収形式で実施した。所要時間は、約10分であった。

4. 調査内容

① フェイスシート

被験者の性別、年齢、学年を尋ねた。

② 浮気の定義に対する考え

松井(1993)が示した恋愛行動の進展に関する模式図におけるカテゴリーのうち、「友愛的会話」、「内面の開示」、「つながりを求める行動」、「協力」、「プレゼント」、「一緒にの行動」、「性的行動」についての20項目について、それらの行動の対象を「恋人以外の異性」に修正し、調査1で得られた「好意」と「真剣な付き合い」についての質問項目(2項目)を加えて使用した。

そして、それぞれの項目について、調査1で得られた「内緒」条件と「報告」条件の2通りずつ作成し(44項目)、これらの項目を浮気の定義項目と命名した。これを表4に示す。

表4 浮気の定義項目

定義1	恋人に内緒で、恋人以外の異性と、友人や勉強の話をする事
定義2	恋人が承知の上で、恋人以外の異性と、友人や勉強の話をする事
定義3	恋人に内緒で、恋人以外の異性に相談事をする事
定義4	恋人が承知の上で、恋人以外の異性に相談事をする事
定義5	恋人に内緒で、恋人以外の異性と、子どもの頃の話をする事
定義6	恋人が承知の上で、恋人以外の異性と、子どもの頃の話をする事
定義7	恋人に内緒で、恋人以外の異性と、家族の話をする事
定義8	恋人が承知の上で、恋人以外の異性と、家族の話をする事
定義9	恋人に内緒で、恋人以外の異性に悩みを打ちあける事
定義10	恋人が承知の上で、恋人以外の異性に悩みを打ちあける事
定義11	恋人以外の異性に、恋人にも見せない面をみせ、それを恋人に内緒にすること
定義12	恋人以外の異性に、恋人にも見せない面をみせ、それを恋人に打ちあけること
定義13	恋人以外の異性と、寂しいときに話をし、それを恋人に内緒にすること
定義14	恋人以外の異性と、寂しいときに話をし、それを恋人に打ちあけること
定義15	恋人以外の異性と、用もないのに電話やメールをし、それを恋人に内緒にすること
定義16	恋人以外の異性と、用もないのに電話やメールをし、それを恋人に打ちあけること
定義17	恋人以外の異性と、用もないのに会い、それを恋人に内緒にすること
定義18	恋人以外の異性と、用もないのに会い、それを恋人に打ちあけること
定義19	恋人に内緒で、恋人以外の異性の、仕事や勉強の手伝いをする事
定義20	恋人が承知の上で、恋人以外の異性の、仕事や勉強の手伝いをする事
定義21	恋人に内緒で、恋人以外の異性にプレゼントすること
定義22	恋人が承知の上で、恋人以外の異性にプレゼントすること
定義23	恋人に内緒で、恋人以外の異性とデートすること
定義24	恋人が承知の上で、恋人以外の異性とデートすること
定義25	恋人に内緒で、恋人以外の異性と一緒に買い物に行くこと
定義26	恋人が承知の上で、恋人以外の異性と一緒に買い物に行くこと
定義27	恋人に内緒で、恋人以外の異性の部屋を訪問すること
定義28	恋人が承知の上で、恋人以外の異性の部屋を訪問すること
定義29	恋人以外の異性の肩や身体に触れ、それを恋人に内緒にすること
定義30	恋人以外の異性の肩や身体に触れ、それを恋人に打ちあけること
定義31	恋人以外の異性と手をつないだり腕を組んだりし、それを恋人に内緒にすること
定義32	恋人以外の異性と手をつないだり腕を組んだりし、それを恋人に打ちあけること
定義33	恋人以外の異性とキスし、それを恋人に内緒にすること
定義34	恋人以外の異性とキスし、それを恋人に打ちあけること
定義35	恋人以外の異性と抱き合い、それを恋人に内緒にすること
定義36	恋人以外の異性と抱き合い、それを恋人に打ちあけること
定義37	恋人以外の異性とペッティングし、それを恋人に内緒にすること
定義38	恋人以外の異性とペッティングし、それを恋人に打ちあけること
定義39	恋人以外の異性と性交し、それを恋人に内緒にすること
定義40	恋人以外の異性と性交し、それを恋人に打ちあけること
定義41	恋人以外の異性を好きになり、それを恋人に内緒にすること
定義42	恋人以外の異性を好きになり、それを恋人に打ちあけること
定義43	恋人に内緒で、恋人以外の異性と真剣に付き合うこと
定義44	恋人が承知の上で、恋人以外の異性と真剣に付き合うこと

44項目それぞれについて、「まさに浮気だと思う：5点」、「まあ浮気だと思う：4点」、「どちらともいえない：3点」、「あまり浮気だとは思わない：2点」、「全く浮気だとは思わない：1点」の5件法により回答を求めた。

③ 浮気に対する態度

浮気は許せるものだと思うかを測定する項目については、調査1で得られた結果をもとに作成した項目を使用した(6項目)。

浮気は避けられるものだと思うかを測定する項目についても、調査1で得られた結果をもとに作成した項目を使用した(6項目)。

これらの12項目を浮気に対する態度項目と命名した。このうち、浮気は許せるものだと思うかを測定する項目は、態度1～態度6の6項目で、浮気は避けられるものだと思うかを測定する項目は、態度7～態度12の6項目である。これを表5に示す。12項目それぞれについて、「とてもそう思う：5点」、「ややそう思う：4点」、「どちらともいえない：3点」、「あまりそうは思わない：2点」、「全くそうは思わない：1点」の5件法により回答を求めた。

表5 浮気に対する態度項目

態度1	浮気をされた場合、1度までなら許せる。
態度2	浮気をするくらいなら、その前に恋人と別れるべきだ。
態度3	浮気は人として許されない行為である。
態度4	浮気をされても、自分がその人のことを本当に好きなら許せる。
態度5	自分がされたら嫌だから、浮気は許せない。
態度6	浮気は仕方がないものである。
態度7	人間が浮気をすることは、避けられないことである。
態度8	女は浮気をする生き物である。
態度9	自制心があれば、浮気をすることは避けられる。
態度10	浮気をされないだけの魅力を持てば、恋人に浮気をされることは避けられる。
態度11	男は浮気をする生き物である。
態度12	恋人のことを真剣に考えていれば、浮気をすることは避けられる。

④ 現在の恋愛状況・恋人との交際期間・これまでの恋人の数について尋ねる項目

⑤ 浮気経験の有無・浮気人数・浮気した(している)時点での恋人との交際期間と親密度・浮気の継続期間・浮気の恋人関係への影響と結末について尋ねる項目

⑥ 被浮気経験の有無・被浮気経験の回数・浮気された(されている)時点での恋人との交際期間と親密度・相手の浮気への気づきかた・相手の浮気の恋人関係への影響と結末について尋ねる項目

⑦ 浮気願望の有無を尋ねる項目

結 果

1. 項目群の分析

(1) 許せない項目

全6項目で1つの項目群をなすものと考えて、この6項目で主成分分析を行った。その結果、第1主成分に対する各項目の負荷量が高かった(.59以上)。そして、信頼性分析の結果、 $\alpha = .77$ と高かったので、この6項目を「許せない尺度」の構成項目として採用することにした。

なお、逆転項目である項目1、項目4、項目6の得点を逆転させた上で、各項目について「とてもそう思う」を5点、「ややそう思う」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりそうは思わない」を2点、「全くそうは思わない」を1点として得点化し、得点が高いほどこの尺度名の意味を有することとした。

(2) 避けられない項目

全6項目で1つの項目群をなすものと考えて、この6項目で主成分分析を行った。その結果、項目10は第2主成分に負荷量が高かった(.62)。この項目10を除いて、5項目で信頼性分析を行うと、Cronbachの α 係数が高くなったため、除外することとした。

改めて残り5項目で主成分分析を行ったが、項目9は第2主成分に負荷量が高かった(.63)。しかし、項目9は第1主成分においても負荷量が0.59あり、この項目9を含めて信頼性分析を行うとCronbachの α 係数は高くなるので、除外しないことにした。他の4項目の第1主成分に対する負荷量が高かった(.59以上)。そして、信頼性分析の結果、 $\alpha = .68$ とこちらも高かったので、この5項目を「避けられない尺度」の構成項目として採用することにした。

なお、逆転項目である項目9、項目10、項目12の得点を逆転させた上で、各項目について「とてもそう思う」を5点、「ややそう思う」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりそうは思わない」を2点、「全くそうは思わない」を1点として得点化し、得点が高いほどこの尺度名の意味を有することとした。

2. 性別と浮気・被浮気経験との関係

性別と、浮気・被浮気経験との間に関連があるかどうか検討するため、浮気と被浮気の実験の有無によって、浮気あり・被浮気あり群(有有群)、浮気あり・被浮気なし群(有無群)、浮気なし・被浮気あり群(無有群)、浮気なし・被浮気なし群(無無群)の4群に分類した。その結果、有有群の男性は10名、女性は16名、有無群で男性は18名、女性は17名、無有群で男性は14名、女性は9名、無無群で男性は100名、女性は105名であった(表6)。

これらの度数について χ^2 検定を行ったが、有意な差は見られなかった($\chi^2 = 2.54, df = 3, n. s.$)。

表6 性別と浮気・被浮気経験のクロス表

		経 験				合 計
		有有群	有無群	無有群	無無群	
男群	度数	10	18	14	100	142
	%	7.0	12.7	9.9	70.4	100.0
	調整済み残差	-1.1	0.3	1.2	-0.2	
女群	度数	16	17	9	105	147
	%	10.9	11.6	6.1	71.4	100.0
	調整済み残差	1.1	-0.3	-1.2	0.2	
合計	度数	26	35	23	205	289
	%	9.0	12.1	8.0	70.9	100.0

3. 性別と許せない尺度・避けられない尺度との関係

性別と許せない尺度・避けられない尺度との間に関連があるかどうか検討するため、それぞれの尺度得点を真ん中（どちらともいえない）の得点（許せない尺度は6項目なので18点、避けられない尺度は5項目なので15点）で分割し、高得点群（HIGH群）と、低得点群（LOW群）に分けた。さらに両尺度を組み合わせて、許せない高・避けられない高群（HH群）、許せない高・避けられない低群（HL群）、許せない低・避けられない高群（LH群）、許せない低・避けられない低群（LL群）に分類し、それぞれを性別でさらに分割した。

その結果、HH群の男性は18名、女性は24名、HL群の男性は68名、女性は74名、LH群の男性は33名、女性は37名、LL群の男性は26名、女性は25名であった（表7）。

これらの度数について χ^2 検定を行ったが、有意な差は見られなかった（ $\chi^2=0.62, df=3, n.s.$ ）。

表7 性別と浮気に対する態度のクロス表

		経 験				合 計
		HH群	HL群	LH群	LL群	
男群	度数	18	68	33	26	145
	%	12.4	46.9	22.8	17.9	100.0
	調整済み残差	-0.7	0.1	-0.1	0.5	
女群	度数	24	74	37	25	160
	%	15.0	46.3	23.7	15.6	100.0
	調整済み残差	0.7	-0.1	0.1	-0.5	
合計	度数	42	142	70	51	305
	%	13.8	46.6	23.0	16.7	100.0

4. 性別と浮気願望との関係

性別と、浮気願望との間に関連があるかどうか検討するため、浮気願望の有無によって、願望有群と願望無群に分類した。その結果、願望有群の男性は31名、女性は22名、願望無群で男性は98名、女性は113名であった（表8）。

これらの度数について χ^2 検定を行ったが、有意な差は見られなかった（ $\chi^2=2.46, df=1, n.s.$ ）。

表8 性別と浮気願望のクロス表

		経 験		合 計
		有群	無群	
男群	度数	31	98	129
	%	24.0	76.0	100.0
	調整済み残差	1.6	-1.6	
女群	度数	22	113	135
	%	16.3	83.7	100.0
	調整済み残差	-1.6	1.6	
合計	度数	53	211	264
	%	20.1	79.9	100.0

5. 性別と経験・態度・願望による浮気の定義の差の検討

(1) 性別と浮気・被浮気経験による浮気の定義の差

浮気の定義について、浮気と被浮気の経験および性別によって差が生じているかを検討するため、浮気の定義項目を従属変数に、性別(男・女)×経験(有有・有無・無有・無無)の2要因分散分析を行った。分散分析の結果、交互作用に有意差がみられたのは、定義38 ($F(3, 280)=3.16, p<.05$) で、2つの主効果において有意差が見られたのが定義31(性別: $F(1, 280)=8.10, p<.01$; 経験: $F(3, 280)=2.95, p<.05$) と定義44(性別: $F(1, 280)=7.36, p<.01$; 経験: $F(3, 280)=5.30, p<.01$) であった。

そして、性別の主効果のみにおいて有意差が見られたのは定義43($F(1, 281)=4.59, p<.05$)で、経験の主効果のみにおいて有意差が見られたのは定義33($F(3, 281)=9.14, p<.001$)、定義34($F(3, 281)=4.56, p<.01$)、定義35($F(3, 281)=9.57, p<.001$)、定義36($F(3, 281)=6.45, p<.001$)であった。

まず、有意な交互作用が見られた定義38について、単純主効果の検定を行ったところ、有無群における性別の単純主効果が有意であり、女性の方がより浮気であると認知している(男 $=3.78$, 女 $=4.53, F(1, 280)=6.20, p<.05$)。また、男性群における経験の単純主効果が有意であった(有有 $=4.70$, 有無 $=3.78$, 無有 $=4.79$, 無無 $=4.62, F(3, 280)=5.11, p<.01$)。そこでBonferroniの多重比較を行ったところ、男性群において、有無群と無有群($p<.05$)、有無群と無無群($p<.01$)との間にそれぞれ有意差がみられた。すなわち、有無群は、無有群や無無群よりもより得点傾向が低く、より浮気でないと認知している。

性別と経験という2つの主効果に有意差が見られた定義31では、性別については女性(4.08)の方が男性(3.55)よりも平均値が高く、より浮気であると感じている。経験について多重比較を行った結果、有無群(3.41)と無無群(3.96)との間に有意差が見られた($p<.05$)。有無群は、無無群よりも、より浮気でないと認知している。

同じく性別と経験という2つの主効果に有意差が見られた定義44では、性別については女性(4.40)の方が男性(3.84)よりも、より浮気であると感じている。経験について多重比較を行った結果、有有群(3.60)と無無群(4.52)との間に有意差が見られた($p<.01$)。有有群は、無無群よりも、より浮気でないと認知している。

性別の主効果のみにおいて有意差が見られた定義43では、女性(4.89)の方が男性(4.65)

よりも平均値が高く、より浮気であると感じている。

経験の主効果のみにおいて有意差が見られた定義33では、多重比較を行ったところ、有無群 (4.00) と無有群 (4.82) ($p<.01$)、有無群 (4.00) と無無群 (4.68) ($p<.05$) との間にそれぞれ有意差がみられた。よって、有無群は、無有群や無無群よりも、より得点傾向が低く、より浮気でないと認知している。

同じく経験の主効果のみに有意差が見られた定義34では、多重比較を行ったところ、有無群 (3.67) と無無群 (4.33) との間に有意差がみられた ($p<.05$)。よって、有無群は、無無群よりも、より得点傾向が低く、より浮気でないと認知している。

同じく経験の主効果のみに有意差が見られた定義35では、多重比較を行ったところ、有無群 (3.86) と無有群 (4.78) ($p<.01$)、有無群 (3.86) と無無群 (4.58) ($p<.01$) との間にそれぞれ有意差がみられた。よって、有無群は、無有群や無無群よりも、より得点傾向が低く、より浮気でないと認知している。

同じく経験の主効果のみに有意差が見られた定義36では、多重比較を行ったところ、有無群 (3.47) と無有群 (4.40) ($p<.05$)、有無群 (3.47) と無無群 (4.27) ($p<.01$) との間にそれぞれ有意差がみられた。よって、有無群は、無有群や無無群よりも、より得点傾向が低く、より浮気でないと認知している。

これらの結果を表9に示す。

表9 各定義における性別と浮気・被浮気経験の差

	性別	経験
定義31 恋人以外の異性と手をつないだり腕を組んだりしそれを恋人に内緒にすること	男<<女	有無<無無
定義33 恋人以外の異性とキスし、それを恋人に内緒にすること	n.s.	有無<<無有、有無<無無
定義34 恋人以外の異性とキスし、それを恋人に打ちあけること	n.s.	有無<無無
定義35 恋人以外の異性と抱き合い、それを恋人に内緒にすること	n.s.	有無<<無有、無無
定義36 恋人以外の異性と抱き合い、それを恋人に打ちあけること	n.s.	有無<無有、有無<<無無
定義38 恋人以外の異性とベッティングし、それを恋人に打ちあけること	有無群：男<女 男性群：有無<無有、有無<<無無	
定義43 恋人に内緒で、恋人以外の異性と真剣に付き合うこと	男<女	n.s.
定義44 恋人が承知の上で、恋人以外の異性と真剣に付き合うこと	男<<女	有有<<無無

p<.05…< p<.01…<<

(2) 浮気に対する態度による浮気の定義の差

浮気の定義について、浮気に対する態度、つまり許せない高・避けられない高群 (HH群)、許せない高・避けられない低群 (HL群)、許せない低・避けられない高群 (LH群)、許せない低・避けられない低群 (LL群) の4群によって差が生じているかを検討するために、従属変数を浮気の定義項目、独立変数を浮気に対する態度尺度として、1要因4水準の分散分析を行った。その結果、有意差がみられたのは、定義5 ($F(3, 301)=4.00, p<.01$)、定義12 ($F(3, 299)=3.55, p<.05$)、定義14 ($F(3, 301)=4.41, p<.01$)、定義17 ($F(3, 300)=3.68, p<.05$)、定義24 ($F(3, 298)=2.95, p<.05$)、定義33 ($F(3, 301)=4.72, p<.01$)、定義35 ($F(3, 301)=6.82, p<.001$)、定義36 ($F(3, 301)=5.75, p<.01$) であった。そこで、それぞれについて多重比較を行ったところ、次のような結果となった。

定義5では、HL群 (1.28) とLH群 (1.04) の間に有意な差がみられ ($p<.01$)、許せない高・避けられない低群は、許せない低・避けられない高群よりも浮気と認知していることが明らか

となった。

定義12では、HL群 (1.91) とLL群 (1.51) の間に有意な差がみられ ($p < .05$)、許せない高・避けられない低群は、許せない低・避けられない低群よりも浮気と認知していることが明らかとなった。

定義14では、LL群 (1.37) とHL群 (1.94)、およびLL群 (1.37) とLH群 (1.79) との間にそれぞれ有意な差がみられ (LL群とHL群が $p < .001$, LL群とLH群が $p < .05$)、許せない低・避けられない低群は、許せない高・避けられない低群および許せない低・避けられない高群よりも、浮気と認知していないことが明らかとなった。

定義17では、HL群 (3.21) とLL群 (2.89) の間に有意な差がみられ ($p < .05$)、許せない高・避けられない低群は、許せない低・避けられない低群よりも浮気と認知していることが明らかとなった。

定義24では、HL群 (3.01) とLL群 (2.63) の間に有意な差がみられ ($p < .05$)、許せない高・避けられない低群は、許せない低・避けられない低群よりも浮気と認知していることが明らかとなった。

定義33では、HL群 (4.74) とLH群 (4.41) の間に有意な差がみられ ($p < .05$)、許せない高・避けられない低群は、許せない低・避けられない高群よりも浮気と認知していることが明らかとなった。

定義35では、LH群 (4.17) とHH群 (4.71)、およびLH群 (4.17) とHL群 (4.64) との間にそれぞれ有意な差がみられ (ともに $p < .01$)、許せない低・避けられない高群は、許せない高・避けられない高群および許せない高・避けられない低群よりも、浮気と認知していないことが明らかとなった。

定義36では、HL群 (4.37) とLH群 (3.87) の間に有意な差がみられ ($p < .05$)、許せない高・避けられない低群は、許せない低・避けられない高群よりも浮気と認知していることが明らかとなった。

これらの結果を表10に示す。

表10 各定義における浮気に対する態度の差

		態度
定義5	恋人に内緒で、恋人以外の異性と、子どもの頃の話をする事	HL>>LH
定義12	恋人以外の異性に、恋人にも見せない面をみせ、それを恋人に打ちあける事	HL>LL
定義14	恋人以外の異性と、寂しいときに話をし、それを恋人に打ちあける事	HL>>>LL, LH>LL
定義17	恋人以外の異性と、用もないのに会い、それを恋人に内緒にすること	HL>LL
定義24	恋人が承知の上で、恋人以外の異性とデートすること	HL>LL
定義33	恋人以外の異性とキスし、それを恋人に内緒にすること	HL>LH
定義35	恋人以外の異性と抱き合い、それを恋人に内緒にすること	HH, HL>>LH
定義36	恋人以外の異性と抱き合い、それを恋人に打ちあける事	HL>LH

p<.05>>> p<.01>>>> p<.001>>>>>>

(3) 浮気願望による浮気の定義の差

浮気の定義について、浮気の願望の有無によって差が生じているかを検討するため、従属変数を浮気の定義項目にして、t検定を用いて平均値の比較を行った。

その結果、浮気願望なし群の方が有意に得点が高かったのは、定義3 ($t=2.41, df=94.45, p < .05$)、定義9 ($t=2.02, df=261, p < .05$)、定義17 ($t=2.32, df=262, p < .05$)、定義23 ($t=2.34,$

df=72.46, $p < .05$)、定義24 ($t=2.26$, $df=259$, $p < .05$)、定義25 ($t=2.97$, $df=262$, $p < .01$)、定義26 ($t=2.01$, $df=262$, $p < .05$)、定義29 ($t=3.04$, $df=262$, $p < .01$)、定義30 ($t=3.16$, $df=262$, $p < .01$)、定義31 ($t=2.84$, $df=63.96$, $p < .01$)、定義32 ($t=2.80$, $df=261$, $p < .01$)、定義33 ($t=2.98$, $df=60.61$, $p < .01$)、定義34 ($t=3.01$, $df=64.88$, $p < .01$)、定義35 ($t=3.60$, $df=61.41$, $p < .01$)、定義36 ($t=3.65$, $df=63.56$, $p < .01$)、定義37 ($t=2.19$, $df=58.07$, $p < .05$)、定義38 ($t=2.25$, $df=62.35$, $p < .05$.)であった。すなわち、浮気願望がない群は、ある群に比べて、上記の定義すべてにおいて、より浮気であると認知しているという結果となった。

6. 浮気の定義項目における平均値の差の検討

浮気の定義項目について、被験者内で得点の差があるかどうかを検討するため、1要因44水準の反復測定による分散分析を行った。各定義項目の平均値をグラフにしたものを図4に示す。

その結果、有意差が得られた ($F(12.86, 3702.92)=742.46$, $p < .001$)。なお、自由度については、球形性の仮定が棄却されたため、Greenhouse - Geisserによる修正を行っている。

また、浮気の定義項目を得点順に並べ替え、4点以上を高群(すなわち、多くの人が浮気と捉えている行為)、反対に2点以下を低群(すなわち、多くの人が浮気と捉えない行為)と群分けを行った。その結果、項目33~41、43、44が高群となり、項目1~10、12、14、16、19、20、22が低群となった。このことから、概ね当初想定したとおり、浮気の定義項目の番号が上がるほど、得点が高くなり、多くの人が浮気に該当する行為であると捉えるようになった。反対に、低い番号の項目では得点が低くなり、多くの人が浮気に該当するとは捉えない行為であることが示された。そして、多重比較の結果から、高群の項目と低群の項目のどれを比較しても、有意な差 ($p < .05$) があることがわかった。

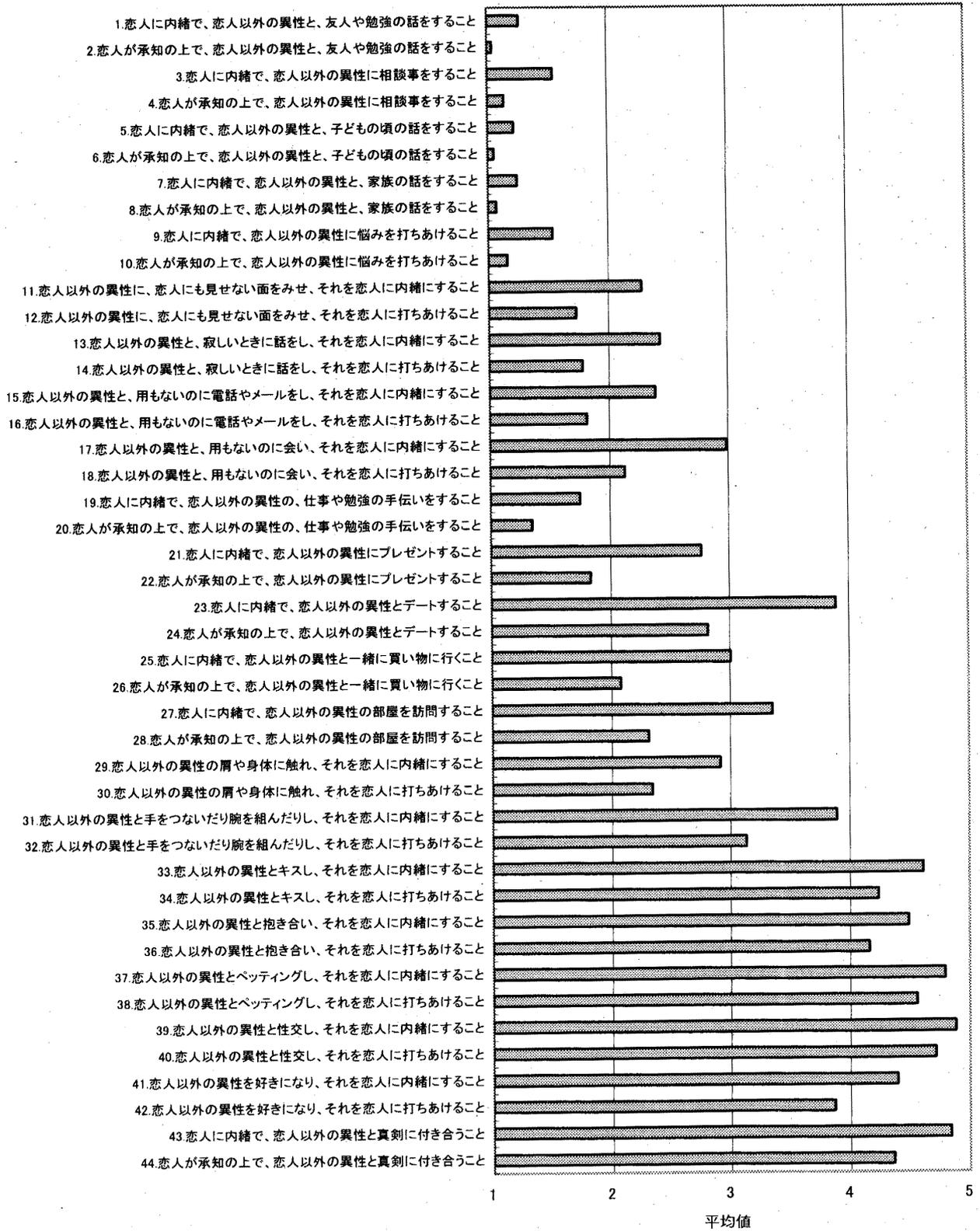


図4 各定義項目の平均値

7. 経験・願望と態度との関係

(1) 浮気・被浮気経験と浮気に対する態度との関係

浮気・被浮気経験と浮気に対する態度の間に関連があるかどうか検討するため、浮気あり・被浮気あり群（有有群）、浮気あり・被浮気なし群（有無群）、浮気なし・被浮気あり群（無有群）、浮気なし・被浮気なし群（無無群）の4群と、許せない高・避けられない高群（HH群）、許せない高・避けられない低群（HL群）、許せない低・避けられない高群（LH群）、許せない低・避けられない低群（LL群）の4群との関連についてFisherの直接確率法を行ったところ、有意な関連がみられた（ $p < .001$ ）。この結果を表11に示す。

浮気を許せず、避けられると思っている人（HL群）は、経験の無有群と無無群で多く、有無群では少なかった。浮気は許され、避けられないと思っている人（LH群）は、経験の有有群と有無群で多く、無有群と無無群では少なかった。浮気は避けられるが、許されると思っている人（LL群）は、経験の有無群で多く、有有群で少なかった。

表 11 浮気・被浮気経験と浮気に対する態度との関係

			態 度				合 計
			HH群	HL群	LH群	LL群	
経 験	有有群	度 数 %	3 11.5	10 38.5	11 42.3	2 7.7	26 100.0
	有無群	度 数 %	6 17.1	2 5.7	17 48.6	10 28.6	35 100.0
	無有群	度 数 %	3 13.6	13 59.1	2 9.1	4 18.2	22 100.0
	無無群	度 数 %	25 12.5	110 55.0	35 17.5	30 15.0	200 100.0
合 計		度 数 %	37 13.1	135 47.7	65 23.0	46 16.3	283 100.0

Fisher の直接確率法による $p < .001$

(2) 浮気願望と浮気に対する態度との関係

浮気願望と浮気に対する態度の間に関連があるかどうか検討するため、願望有群と願望無群の2群と、許せない高・避けられない高群（HH群）、許せない高・避けられない低群（HL群）、許せない低・避けられない高群（LH群）、許せない低・避けられない低群（LL群）の4群との関連について χ^2 検定を行ったところ、有意な関連がみられた（ $\chi^2=30.69, df=3, p < .001$ ）。この結果を表12に示す。

残差分析の結果、願望有群では、HL群がより少なく（ $p < .01$ ）、LH群がより多い（ $p < .01$ ）という結果になった。願望無群では、HL群がより多く（ $p < .01$ ）、LH群がより少ない（ $p < .01$ ）という結果になった。

表 12 浮気願望と浮気に対する態度との関係

			態 度				合 計
			H H群	H L群	L H群	L L群	
浮気願望	有群	度 数	6	11	26	10	53
		%	11.3	20.8	49.1	18.9	100.0
	調整済み残差		-0.5	-4.6	4.9	1.2	
	無群	度 数	29	116	35	26	206
%		14.1	56.3	17.0	12.6	100.0	
調整済み残差		0.5	4.6	-4.9	-1.2		
合 計		度 数	35	127	61	36	259
		%	13.5	49.0	23.6	13.9	100.0

$$\chi^2=30.69, df=3, p<.001$$

8. 浮気願望と浮気・被浮気経験との関係

浮気願望と浮気・被浮気経験の間に関連があるかどうか検討するため、願望有群と願望無群の2群と、浮気あり・被浮気あり群（有有群）、浮気あり・被浮気なし群（有無群）、浮気なし・被浮気あり群（無有群）、浮気なし・被浮気なし群（無無群）の4群との関連についてFisherの直接確率法を行ったところ、有意な関連がみられた($p<.05$)。この結果を表13に示す。

浮気をしたことはあるが、されたことはない群（有無群）では、浮気願望のある者の割合が高く、浮気をしたことがない群（無有群と無無群）では浮気願望のない者の割合が高かった。

表 13 浮気願望と浮気・被浮気経験との関係

			態 度				合 計
			有有群	有無群	無有群	無無群	
浮気願望	有群	度 数	6	12	1	34	53
		%	11.3	22.6	1.9	64.2	100.0
	無群	度 数	18	19	18	152	207
		%	8.7	9.2	8.7	73.4	100.0
合 計		度 数	24	31	19	186	260
		%	9.2	11.9	7.3	71.5	100.0

Fisherの直接確率法による $p<.05$

考 察

1. 浮気の定義について

恋人に打ち明けない「内緒」条件と、恋人に打ち明ける「報告」条件については、全ての項目において、「内緒」条件の方が平均点が高かった。この結果は、調査1で得られた回答とも一致しており、同じ行動でも、恋人に内緒にすると浮気と認知されやすいといえる。この原因としては、恋人関係において隠し事をしないということがとても重要であることが考えられる。

浮気の定義項目の中で、多くの人が浮気と認知していることは、恋人以外の異性とキスすること、抱き合うこと、ペッティングすること、性交すること、そして、真剣に付き合うことであった。今回の調査では、浮気という言葉の定義を研究者が設定せず、各被験者が考える「浮気」の経験や態

度について回答を求めたが、今回の調査対象においては浮気の定義は上記のようなものということになった。しかし、この定義には個人間の相違があるので、自分は浮気と考えなくても、恋人が浮気と感ずることをしてしまい、密かに恋人のことを傷つけたり、それとは逆に、自分が浮気と考える行為をしてしまい、恋人に対して申し訳ないと思っけていても、実は恋人が考える浮気の域には達していなかったということも考えられる。

しかし、本研究の結果に基づくと、恋人以外の異性と行動を共にする場合に、浮気をすることや浮気と見られることを避けるためには、松井(1990)の第3段階以上の行動を含む、本研究における浮気の定義項目の33~41、43、44は、行わない方がよいのではないかと考えられる。

逆に言えば、本研究における浮気の定義項目の1~10、12、14、16、19、20、22であれば、浮気とは捉えられにくいので、実際に行ったとしても、一般的には許容範囲であると考えられる。

2. 浮気をする人とは

上記のことをふまえて、このような浮気をする人というのは、どういう人なのだろうか。

総合的にみて、浮気傾向が見られたのは、(1)「男性」、(2)「浮気経験はあるが被浮気経験はない者」、(3)「浮気は避けられないので許せると思っけている者」、(4)「浮気願望のある者」であった。なお、(1)から(4)の群は独立しているわけではなく、それぞれ重なり合っけているので、1人の被験者が(1)から(4)の全ての群に属している場合もある。属している群の数が多いほど、その人の浮気傾向が高いと考えられる。

以下で、(1)から(4)が、それぞれどのような群なのかを見ていくこととする。

(1) 男性

浮気の定義に関して、恋人以外の異性と手をつないだり腕を組んだりすることや、恋人以外の異性と真剣に付き合うことなどについて、男性は女性よりも浮気と認知しにくい傾向がみられた。よって、男性の方が、恋人以外の異性ととの間で行われる行動に対して、「これはまだ浮気ではない」というような甘く考える部分があると考えられる。このことから、男性の場合は、自分の経験に対しても甘い基準で考えて回答している可能性があるといえる。したがって、研究者の側で浮気の定義、基準を設定して今回と同じ調査を行った場合、女性よりも男性の浮気経験が多くなるのではないだろうか。

(2) 浮気経験はあるが被浮気経験はない者

この群は、恋人以外の異性と手をつないだり腕を組んだりすることや、キスすること、抱き合うことなどについて、浮気であると感じにくい傾向がある。また、この群は浮気を許せると思っけている者が多く、浮気願望がある者も多い。つまり、この群は、浮気を経験しているがされた経験はないので、浮気をされることの痛みを知らず、浮気に対する恐れや罪悪感が少ないと考えられる。このため、恋人以外の異性と行われる様々な行動に対して「浮気」と認知しにくく、また「浮気」と認知した行動についてもそれらを許容することができ、これからかもしれないと思うのではないだろうか。

(3) 浮気は避けられないので許せると思っている者

浮気は避けられないので許せるという群は、子どもの頃の話をする事や、キスすること、抱き合うこと、寂しいときに話をする事などを浮気と感じにくい傾向がある。また、この群においては、浮気をしたことのある者が多く、浮気願望のある者も多い。つまり、この群の者は、浮気を容認しているため、恋人以外の異性と行われる様々な行動について、甘い基準で見ている。そのため、それらの行動を「浮気」と認知しにくく、実際に浮気行動をとったり、願望を持ったりするのだと考えられる。

一方、浮気は避けられるので許せないという群は、子どもの頃の話をする事や、キスすること、抱き合うこと、恋人にも見せない面をみせること、用もないのに会うこと、デートすること、寂しいときに話をする事などを浮気と感じやすい傾向がある。また、この群においては浮気をしたこともされたこともない者が多く、浮気をしたことはあるがされたことのない者が少ない。そして浮気願望のない者も多い。つまり、この群の者は、浮気に関する経験を持たない傾向があり、浮気を否定的に捉えているので、恋人以外の異性と行われる様々な行動を厳しい視点で見ている。そのため、それらの行動を「浮気」と認知しやすく、自らがその行動をとりたいたとも思わないのだと考えられる。

許せない尺度と避けられない尺度との関係については、以上の2群が特徴的であった。前者は、浮気を容認しており、肯定的な態度であるのに対して、後者は、浮気というものを認めておらず、否定的な態度であるといえる。

(4) 浮気願望のある者

浮気願望を持っている者は、浮気願望を持っていない者に比べて、恋人以外の異性との相談や買い物、デートや性的行動など幅広い行動について、より浮気でないと感じている傾向にあることが明らかになった。また、願望有群においては浮気をしたことはあるがされたことはない者が多く、浮気は避けられないので許せると思っている者が多い。つまり、浮気願望のある人にとっては、浮気ではないと感じている行動の範囲が広く、「これはまだ浮気ではない」というように甘く考える部分があると考えられる。浮気に対しても寛容であるため、「あまり浮気ではない」と認知している行動を超えたさらなる浮気を求めているのではないだろうか。

3. 浮気・被浮気の経験とは

浮気をしたことがある、浮気をされたことがあるとはどういうことなのだろうか。

浮気・被浮気経験で分類した4群のうち、最も浮気に対して敏感で、広い範囲の行動を浮気と認知しやすいのは、浮気をされたことはあるがしたことはない群である。この群は、自分は浮気などしないという者が多いため、誠実な恋愛をするように感じられる。しかし、その一方で、恋人の浮気を恐れるあまり、恋人にも誠実な恋愛を求めため、恋人の行動を制限するなどして、束縛してしまう可能性がある。よって、この群の考え方は、行き過ぎれば恋人関係にとって障害となる危険性があると考えられる。

そして、最も浮気に対して寛容なのは、浮気をしたことはあるがされたことはない群である。この群は、相手の浮気を許せると思っている者が多いため、恋人に対して寛大であるといえる。しか

し、その一方で、自分に対しても寛大であり、浮気に対する恐れや罪悪感が少ないため、浮気をしてしまう。浮気をすることによって傷つく人がいるということに気づかない限り、浮気を繰り返すのではないだろうか。この群の考え方は、恋愛における信頼関係を築いていく上での障害となる可能性がある。

浮気をしたこともされたこともない群は、浮気をされたことはあるがしたことはない群には及ばないが、浮気に対して、やや敏感である。「浮気はだめだ」という固定観念や強い信念を持っているためであろう。よって、この群は、このままでいけば、普通の恋愛をすると考えられる。

浮気をしたこともされたこともある群については、統計上、他の群との差がなかったため、最も平均的な考え方を持つ群であるといえる。浮気と被浮気の両方を経験すると、どちらの立場も理解することができるため、その中間の考え方になるのだと考えられる。そして、様々な経験を糧にし、深みのある恋愛をしていくのではないだろうか。

このように、4群にはそれぞれ長所と短所があり、浮気や被浮気の実験の違いによって、恋愛のタイプも変わってくると考えられる。このことに関しては、さらなる研究を期待する。

引用文献

- 橋本順聖 1992 大学生の恋愛に関する態度測定を試み 仏教大学心理学研究所紀要, 8, 16 - 23.
- Lee, J.A. 1974 The styles of loving. *Psychology Today*, 1974, October, 43 - 51.
- Lee, J.A. 1977 A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 3, 173 - 182.
- 松井豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355 - 370.
- 松井豊 1993 恋ごろの科学 サイエンス社
- 中村雅彦・藤本真未 2001 愛媛大学教育学部紀要—第I部教育科学—, 48(1), 19 - 34.
- Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 265 - 273.